

最近の病名

山本 俊幸

皮膚科医になって30年以上になるが、いまだに耳慣れない病名、新しい病名は次々に出てくる。いくつか例をあげると、eosinophilic annular erythemaという病名を最近しばしばみかける。環状を呈する紅斑と、組織は好酸球の浸潤が顕著に認められるものを指し、中央に色素沈着を残して拡大することもあるようである。原因は多くの場合不明だが、内臓悪性腫瘍に関連した報告も散見される。Wells症候群との異同が問題になり、両者は同一のものとする考えや、eosinophilic annular erythemaはWells症候群を含む、あるいは基底層の空胞変性やムチン沈着の有無で病名を使い分ける考えなどがある。組織学的にflame figureがみられない点で鑑別している論文が多いが、flame figureはWells症候群に特異的ではなくさまざまな疾患や状態でみられる反応である。

「環状紅斑」と「環状の紅斑」を意識的に使い分けている皮膚科医がどれくらいいるかはまた別問題として、Darierの環状紅斑をみかけることは最近まずないし、組織学的に(あるいは臨床もそれに呼応して浸潤を伴うかそうでないかに分かれるのだろうか)superficial typeと deep typeに分ける分類も提唱されたが、広く普及されてはいないと思う。「いわゆる環状紅斑」と一時的にせよ診断名をつけるよりは、eosinophilic annular erythemaとつけたほうがなんとなく満足感が得られるのかもしれない。好酸球が浸潤するものとしてinsect bite-like reactionという病名もあり、血液系(とくにB細胞性)悪性腫瘍を有する患者にみられることが多い。虫刺様皮疹はSjögren症候群や関節リウマチにもみられるが、血液系悪性腫瘍に伴うものだけが独立した疾患になったのであろうか。ちなみにこの病名で本誌に掲載された症例を巡って、～like, ～様, の使い過ぎについても「声」の欄に意見が寄せられたが(2018年8月号)、その後の盛り上がりには欠けた。同義語のeosinophilic dermatoses of hematologic malignancyも組織反応がそのまま病名になったようなものである。

好中球が浸潤するものとしては、SLE患者にみられるneutrophilic urticarial erythema, neutrophilic urticarial dermatosisというタイトルを最近よくみかけ、ほかにも似たような病名を目にする。SLEでは好中球の活性化が特徴の1つであるため、SLE-associated neutrophilic dermatosisと一括する立場もある。SLEに限らず成人発症Still病や他の自己免疫疾患に伴う報告もみられる。

一方で、消えそうで消えない(消えるべきなのに消えない)ものもあり、その代表にWeber-Christian病が浮かぶ。リンパ腫の診断技術がまだ乏しかった100年も前に提唱されたこの病名が、いまなお根強く残るのは、誰かがどこかで使ってしまうからである。報告が少ない理由を、近年症例数が減っていると勘違いされることもある。Rothmann-Makai症候群もその範疇(消えるべきもの)に入ると思われるが、表面の発赤を欠くなど結節性紅斑とは臨床が異なる症例はなんと診断名をつけたらよいか迷うこともある。ほかにも病名を巡って皮膚科医が感じていることは多々あると思われる。毎年似たような教育講演が繰り返される総会で取り上げてほしいと思う。